龍の棲む日本

黒田日出男著
岩波書店 2003（岩波新書）

文学部教授 **上原　秀明**

本書は、日本の中世的国土観について龍を中心に展開していく。中世の＜日本＞とはどのような＜かたち＞をしており、それは中世人によってどのように意識され、いかなる意味をもっていたのか、という国土論からはじまる。こうした＜国土＞を考えさせてくれる最高に魅力的なテキストが行基式＜日本図＞であり、行基図金沢文庫本に見られる、日本の周囲を囲にょうする巨大な動物が、何で、国土とどのように関わっているのかを主題として謎解きが始まる。日本のかたちは、密教法具の独鈷（とっこ）の形をとっていると推測し、こうした中世宗教思想の世界こそが、行基式日本図を生み出した母胎であるという。独鈷は聖なるかたちであり、日本も聖なる国土といえると結論づける。このように行基図とは、仏神が描いた聖なる＜日本図＞なのであり、天皇の印である神爾（しんじ）でもあったし、日本を神国とする根拠にもなっているという。次に本図の描写内容の考察が進み、島々としての＜日本＞と、＜かたち＞が不明確な異国・異界との対立的表現など、旧来あった行基図の国土認識の上に、蒙古襲来前後の東アジア世界認識が接合されたものが金沢文庫本日本図であるとする解釈は新鮮である。

最後に日本を取り巻く龍の問題が残っている。中世の日本の国土には龍が溢れんばかり存在しており、龍穴や湖海・滝・池などに棲んでいた。巨大な穴道のネットワークによって繋がっており、龍が棲んでいたと思っていたのである。近世初頭の大日本国地震之図になると、龍は大蛇に近くなり、頭部に剣が突っ立っていて、そこに要石と書かれてくる。要石はこの日本を取り囲む巨大な龍体を、動かないように押さえている。中世の宗教思想を特徴づけるメタファー的思考は、ふわふわ漂いがちな国土を繋ぎとめる石・柱・杭を生み出し、それを日本の中心軸としたのである。独鈷のかたちをした行基式日本図の龍の姿は 17 世紀後半以降に崩れていき、意義や意味も急速に忘れ去られていった。こうして次に鯰（なまず）が登場する至る近世的な国土観へ変わっていくのである。

著者はその作成目的に沿って読み解くというストーリー性を重視する立場をとり、推理小説を読むような時間を過ごすことができ、楽しく研究をしていく一つの技も教えてくれる。評者は黒田さんとはそのような人と想像している。